繪本烈戰功記 後篇 六

2257
18

池清

特 遠13
2237
18

烈戦功記後篇巻之六

目録

信玄聴訟裁許之事
僧与婦人慈情似図
上杉謙信加勢于北条家事
客星出現之事
判兵庫客星仰図
信玄被作木像事
韮山合戦之事

辻川原村武勇之図

武田信玄大夫侯之事

第

信玄駿河を攻略する事

武田信玄甲斐に有て、駿河国を攻略する様は、北條氏康父子、関東を攻しを聞て、駿河を子に譲られ、其上駿豆の城代共、或は討たれ、或は追はれたるを以て、豆駿共に定めて越後へ移み、謙信と合戦し、深澤城へ攻寄り、再び城を取返さんと働く事久しかりしが、終に其深澤城代山田彦左衛門信茂の方へ、家老を申遣有て、駿河の城代山田左衛門深澤の城代山田彦左衛門方へくれければ、信茂思つて、駿州深澤の城、代山田彦左衛門方へ、加勢として、信茂嘆えの言葉、山田掃部を始として、逆等十騎二十騎宛、思ひ〳〵に、登城、山田掃部を始として、逆等十騎二十騎宛、思ひ〳〵に、深澤城へ入城させけり、信玄又加藤丹後守に、萩原聖前を相添へ、是に奇計を授けて上駿の原に指向けられ、今は人安しとて兵を休め、国政を正しくし、怪有なる公事

第戰

こゝに出羽の国、出羽仙蔵となれば、信州佐久郡の百姓に、等
たゞ言へる者有て、妻を菩提寺に言りて、同所より嫁しゝ婦
暮し居たりけるに、等太が家は浄土宗にして、妻の実女が里
は日蓮宗なりければ、此家に嫁して猶日蓮宗に帰依する事
甚だしく、夫等たしも是を勧めて、俱に教学に引入れん
とすれども、夫は之の宗を嫌て、他宗に成らんは左道
なりとて、毎に取合はざりける様に、早晩夫婦の中さへ悪け
て、夫は死の忌日に、月々死度宗檀寺の浄土宗

より傍と迫ふまで。妻い歩板ちて出も至へ死者と揃て
行ぬ。我亡父母の忌日ふれば日蓮宗の寺より
妙歌と号傍と清和。同向とかめて純一と蓮宗の凝
呈れども。仏事するれば男も呈を制し蓮宗仏中に憤だ
押而居らるゝよ。武対まで名を要用ふて他ふ出。一宿有
るゝよ。其翌日第女が亡父の忌日ふれば日蓮宗ふも
呈て仏事居るゝよ。例の妙歌早朝より面向ふ来ふ寛
如いまが冒を朝寝して清起出るゝ而ふれば妙歌
ふ席ふ着んも家の毒ふ
貸へられよと云て。例と庭ふ行て厠ふへ入るゝよ。其女急
で席と返るゝて。仏寺呈へ入セタ人妻野寝ふ

結せ給らせて如件うくことを
ゑと供べ。美女ゑ拭と拭来て
ようゆり味りくれば。姉歌い遠
間まくる様よえくり けりよ等ち女ゑ
色伝渇仕るを供ようくべ
えるより。密夫類臣とて。怒
歩例ふ義者し作あていい
結くれば。美女りい美て。色と
て安けど。隣家の者た
くれども。し色い咎浮ち宗
等ちと宝るゆ紙。却
刑敬と云ふせよと。ことりち
きる様ゑ徒。等ちよりて。考く姉歌が美女と怨
寺ようい。而姓名ち。西作と云甲府ゑ作出ふ。又日星宗の
織ゑ苦るの様と云ち。紀州と別ひふ。役所ゑ和ってい
岩号大義ち高つ色と云よって。一統載作ゑ如くけれ
姉歌と歌ゑ歌ことられば。嫉ゑ密まの独様臣。又名太と
羅ゑ落さんゑ。様ち危し。やゆせんとて遂ゑ被露ゑ及び
くれば。伝云微笑し低。己河ゑ云出られる様い。先て縄
かりたる出家。余宗ゑくべ。稼く穿鑿もべられ
尤円美宗ゑ於い。て偽ゲ猪也。千の人い。法華経の中ゑ心と
も食将一比丘若五比丘一心念佛と有。色と別ゑ耐へ里に入て

乞食せんとするべし。されども人の比丘と連るべし。若比丘の尊
ハ。仏の仏を念ぜんとのみぞ。多くべ仏らして今一人の比
丘を。中とひて連ぬぬぞ。若庸なる信の事深て。人の
ぞうべ。数珠とつまぐり。最殊猶なる絆して。人の家ふい
まぐるを。早朝より法衣をとりて。人のふ霊と立ちて。
る拳動ハ。千宗門仏と云法華経の云ふ肖なる
程なるべし。然るべし。苟仏絆を生ハ仏出家と捨なる
然如もなるを。百姓の子除て。猥の縄とうけ
るなり。仏祇への恨。且捨ふ肖の狼藉なれば。首とはな
る。尚然れ共。わが出家なるべ仏。慈悲の心深ふ
ん。仮ども百姓を。罪一等と。今日より。菊舎云

又出家の法ハ。いふ所出家ハ。千宗門の第一
の経なり肖なるふ地。方便の者と。我仏分の寺院の
さるべきいるべれば。向後他国の移り。修学ふ仏と励
し。経なり肖なるべし。出家の出家なる道と約ハ仏と有
て。青沼助兵衛。市川宮内のあんの仰付られて。生涯と迄
能生の法へと妙数を送り出されるる。千女なるハ。嫁の宗門
いふもあれ。嫁ていまの宗有の法なの分強なるべ。己ゞ
千宗ハ他宗の侍と生るべ。婦乃の肖なり。此後ハ夫の
宗門の入なるべ。厳叱せるべ。既と成て。先らく去ぬに及び
なるべ。千度等を。赦免と学りけれども。仏一件。元来千女ゞ
日蓮宗の凝て。千宗ハ侍と生るべ起るべれば。第太

365

遂に妻を離縁而ゆれば、是女牛の家より取り。孫益田是宗ふ嫁かこまり。彼月三昧に日を送りゐると。弟なる者。是に余りるの世と。涼ゆれども。子に成べきて。後に払されくる。姉歌が子をとめ。是を慕ひて能やうの歌へと知れ名る。是宗は頼るこゝる者の心の弱い止ずゝれりの孔

上杉謙信加勢于小條家事

相見小田原の城を小條左京大夫氏安。同氏政に依て明京ふ返ん。後河と武田家の有と志ると悔こ。越後の春日山へ使者を送。備も甲兵の武田信玄。虎狼の心とゝ猥に吾を目向。氏安ゞ外と掠奪る。遂後兵までも横領。是に張氏安父子。婆戦いとの尤彼貪欲の

後来而南り雖いれば。何年平張信玄。ゆるると出られ給んこと者奉いも。さとれば北方陸奥の城を始らと後豆の備墨と云五。命種者の恥辱と雪いんと。彼と東而彼云されるべ。條信早原仲宗有て。近く出張くゝ云べの前。日と極て返言出べ。氏安父子大と歎ら対と。出師の今とゞ鶴らられる。彼と後兵源氏の城へ小條左衛門尉氏安。氏猪。と退るゆゝん。信玄云ゝ。小山田弾正。弱井右京亮等と羅ゐれ名る。山本人。武田家と於ざる武功の誉も世へざる。小條方ふ見と働り。純兵共。不ふ推ふ。急死城而逃去事必定也。然ば源氏と元五さうんふ。小條事うあゝん先。松田尾張守一まゝも

攻

英氣へ易うるゞして。永禄十三年四月廿日松田尾張守
三千餘騎を従へ源次義元へ攻掛る。城のこもる兵
陣を張て。翌廿日巳の刻より義元かゝる大軍と
焼立。今井藏と微塵より乃んゞ勢と見へけゝゞ。城の純兵拵
とゝて夜の給より落行ゞと。松田推寄て色々の工夫
の外。城よりも英氣あゝつれ。中と完城の拵るふこゝろ
ゞ。松田ふ例より思ひ。外堀の中援をんゝ
うゝんや。郡内の小山田伝義より。郡勢にて名誉の者
士共夜より給まへ城。防戦の准備厳密ちうこゝゞ
松田尾張の乃大より強き。偽い伝言疾もゝ南ゝの上起ゞ
し小勢とん。英んゝと及ゞゝゞて。手薄より備改をひ

柄

足柄さゝて引んゝすると。城中より見と眺ゝて小田原
逆兵三十五騎と後殿より出て。松田ゞ引乃ゞ途を
防切んゝを給と。松田の乃見をとるよう。大より郡内
先乃ゝゝゝゝゝゝゝ
緒軍と逆立。術ゝて。行下川と歩河ゝ。松田
尾張の乃乃。大刻の雪着世伝ゞ。十文字九槍と横行不檀ふ言と鬱
大の眼と怒せ。涙い松田尾張守也。誰ら来て猪員と変んやと大言ふ
呼りゝれゞ。城兵の中ふ小文者是とゝて。ゝの松田ゞ誉動ハ。偽皮
三郎の対。長坂橋より於。遮人張花ゞ曹操の百万の大軍に向
と。生の似ゝる毎ゝるゝと云ゝれゞ。小山田歩笑て。何那ゝゝ赤勇
い。僅三十人騎るゝるものと。松田の張花。言ゝて我らゝ城より

まざ〳〵せらるべし。川を渡して猪員へまでおよぶべし。天晴武者振よいぞと。一同よ喜と勇ひ申。引取〳〵られば和田もろと共〳〵。是より走べしふうとせて。是柄の城おそろしへ入る。然る山中。小田原へ喰〳〵べ。大将氏安。復越後へ使をとんを合と定る。剣氏政と大将として。三万八千余騎をて北条を雷鼓有て。再原氏の陣へ推寄。狭埔のどに北田。一拳よ城を攻んだ。是ともつぐせば。黄昏ことしれ城代小山田弾正。弱井右京亮。武田家ことを。宿老らるれ流石よ伝玄の命を蒙る程の者るれば。他の到雷の空の者ゆ待こをれ発ず。千上弱間の援兵。是又寛竟の兵ものれば小条の大軍を屠ともせば。遠ろ〳〵矢挟ろふ狭地を配

知

ものぶれの士卒を陣ふ。仏兵寄めて矢業をろと。弛まるで命を伝へける程ふ。強雨の如よ矢出し殺地。一ろれるへ安りろる。是よ振て小条勢。死人よ員の数をもべ。氏政ふ法弱のを知ろれば。攻極で清軍を

献

ぬべ。かろる小陣へ一拳よかつて。味方と挟ぜんよりへ。上杉と結て。熱光よ攻べ〳〵して。係よ命と伝。陣を走拳ふて。雲固よ侍と連て。千ろふ田畑を毛羅ふせよて山辺の麦畑と振。極田と混て。係伝の加勢と。今明日る居て走ろよ。城中ふも軽る裏と休て。遠ろべ疲れて〳〵ろんと。雪ふの動地とぞ。ひび居る。高下に出て。伝玄系西上弾正へ義向垂れる雨の。加茂丹後守。萩原主殿等。一千余騎小

て。小條方の諸氏。義橋の女婿へ不意よ推寄。義を攻ること急なりければ。鄕山の城主。小條氏照。藥井の城代。内義大和守。加勢として向ひられ共。武田方伏勢と成て。小條内義の援兵と戰て追返されば。諸氏義橋の女婿益危く。小田原及氏政が陣中へ急を告る布波なりける程よ氏政大よ作天し。伝云の古狸我と出ぬれ。再出原へ乱入せんと覺たりとて。遂よ涼沢の囲を解。小田原さして引退るべき。城兵へ義を伝云より寄汁と接り出でて。氏政が寒解面引るべ人數扱の中と。矢倉と寄てうん物し。朝笑ふてぞ居られける。義よ又上杉謙伝へ。小條氏ふよ合有べしと越後と打立。利根弘沼而まで進されける所よ。氏政よ扱を見へ引

五され。て合れ遠とあり。謙伝も乃を追て。伝云長沼へ出張せ〜まる。小田甲兵へ出けまば。伝云さ〜ば。紂ごた五十條猪と引率して伝云川中島よ出陣而六月下旬上洛へ向んより。謙伝よ為ての一戰ハ面白て。恵よ二方陣有れ。謙伝如何ぞ思れん。上杉の方へ仲と出されまば伝云も亦為上聖人と敵向ある。高下而て。上杉方厩橋の城代小城丹後守。赤井西と守るべ。伝云ばと乱代通ふべやとて。多勢と率し。城と出でぞ遊る。伝云見を蛇〜ふて。ゆ上き者共。流石ハ謙伝の雷士也と。強て行大ゆを見れ。彼等又一高あて〜学よ追返て〜せよと命ぜ〜まれば。城侍者等領諾為恵よ敵四へ入れば

故に味方魚鱗に蒐りまで戦ひけり。武田方の城将
唐沢が嫡子。織部といふ。一騎当千の勇士。続て唐沢が次男虫
次郎右衛門。二騎当千にて血戦に及ぶ。是もまた甲兵数多。織部討
死しぬ。虫次郎も勢を失ひ。将卒を揃へて掩殺しければ。小
城が枝忽ち落ちて。廐橋の城へと引退く。信玄数多の軍兵を
是を追はせず。退いて箕輪に着陣し。城外に陣営を
連ぬ。小条氏政は。上杉謙信が出陣の軍勢を待て大唱一
戦を催さんと。武威を示して控へたまへり。因に小条氏政は
謙信上杉と見ると出られしと呼て。三万八千人を従へ。旗を出陣
而。武田殿又直に向ふべし。先陣既に松山に推着けり。新田と
に上杉謙信越後上野の軍勢二万余騎を率ゐ松山に着陣せり

小条上杉両旗の軍勢都合三万八千余人ときこえたる武田
の手候。追々に注進をしければ。信玄本陣に点検して。まづ軍令を定め
らるるの所に。上杉謙信。無双の勇将なれば。熟思惟けるは
信玄只一手の軍勢にて。両家の大軍を待つ。十分合戦せん
彼を見て挙動。実に良将といへども。まづは南方小条白旗を
以戦ず。いかにも多勢なれば。此度の戦信玄も勝て負
ても恥辱なれば。氏政此手に着陣せしまま。陣営を占めて
まづ軍勢を揃へ。越後を遮て引きられければ。氏政途中
まで此趣を聞。我一手にて信玄に向ふも及ばざれども為方無
武田より返し。おもむきを引取ける信玄然も然なん
とて。箕輪を打立んと欲らるるの如し。今の小板三河が為永井

出て来守。味方より弛来て。武兵の内より。丑。除各領。出て小へ
組てる所のひ。まへに勢と出されいらぐ。我〳〵案内仕て。此方に
いれやべると云われば。伝玄許宜云て。刑小隠尾張也。安
中元近。京隼人。跡始大炊介。出坂出家。五甘。出根笠の
七郎と共同〳〵まりふ。十日の内より平均より及〳〵べ。伝玄威
収めて。小隠三河守へ又和平。永井出て苔せより三和平を強
山名。教巣の方より新く陣と築き。伝右の与月五八日
友弥助十良の女人とさ迄。七月上旬。甲斐より武田のまりる
客星出現ける
永禄十三年秋七月より。二星と顕者の対より成る。越より去
年はて。東の空より高。雲の立客星の出現而。年を越ても

狂く。光明ありなれば。何所とても寄見の思ひとなる。これ
凡るのよりしば。黒年干戈動て。日本六十余見国海の
街とる。万民一日も安堵より居ぶ而。患難より苦ぶ左より新る天
変有りの和。狂ひよりいろ有る災害並るやと。甲伝の
俚民も落氷と踏ひと為る。茲より伝見水内郡より安部兵
庫と。右郷より妙と厚る者有。元来江見石ちの者而
清明ぶ後藤と。易道の奥旨と極。内典外典も深
人とるう正直ふて。形気卵も正。右の如も正法ふく
奇怪を述るかる。殊より判形ちん。若山を示ちる。適
尚神のめるり久ふ依。世よあざなしてれの兵庫と
ぞ称る。伝玄も平郷と感。且人柄と賞せるきて

373

判乃兵庫客星を仰ぐ図

甲及よ徴よせ。伝法玉水内弼よ於。百世の須知地を宛行
れけるぶ。今度甲府よ召れ。彼毘沙門堂の庫裏近
き所せ。武蔵三河も。若根内近頃の去人とんや頃の客
星の去出と同せられ。れ。兵庫殺で弼り。暫あて云
ゆる様。彩る天変往古よりも例多いや人熟古と
温。彩と矣い処。此客星よ依て。適去るの去とや中無
まを例と為い様ゆ。好るも。安よ如ばとそやれ人
殊よ此客星。天下の怪異を示し。給ふ而ゆて。世中騒
と使季よ及び。技業を中ふ古より連縁ゆる家業
族。次第よ滅亡し。彩家ハ日を追てとびこり此日彼皮
うとゆれば。今日ハ主とゆ。公武修法を失ひ人深花よ

其

華

繞ひ。道この俗ゆ弼ゆて。疫大赤と称。茂ゆるゆて。
彩寿と布巳賞し。今ゆ同ゆ。仏法とそも久さ宗有ハ衰微
彩ゆ宗門慈昌殺。又百姓所人の家ゆ。同様ゆ家拙
地と彩ゆの渇れ。彩ゆ加中ゆる。言ハ。天命と恐ゆの名ゆ
の勢ゆ。天道ハ盈と虧ゆ。ゆ而ゆ。鬼有ゆ方孫ゆ。武威盛
ゆて此ゆ亜び。怪ゆ様ゆ諸ゆ此ゆ。君ゆ
怪者ノ文と徳。若根武蔵と
ゆ斉合ゆ平有ゆ。数同ゆ
ゆ。数ゆ此ゆ素ゆ近。れ鼓の恵と業二十年ゆ同ゆ
知ゆと。ゆ。安徳ゆ世と送ゆ。実ゆ此ゆ仕合西ハ今ゆ
客星出現の同ゆ。ゆ上ゆ。ゆ上ゆ。依ゆ向後ゆ

判官とお止めヒ。三人の輩と拾い人夫等柔弱ゆえ。所詮れ奉
云と勧べ元者ゆえ。所人ゆ絶命と云いで
せめて其の仕恩報ゆえ。別ゆ別去と揉光
義を云ゆ。出ゆ其を云われば。伝丟刎件宜みゆ。
云度い。水内郡の所仏と云ゆ。の絶ゆ
三人の輩ゆ儀。甲府の柳小路ゆ入所て。家を求て所人
とゆ。一日ゆ夕ゆ。甲府の命と保べ。と云遣ゆ。千度甲府
義足。旧里ゆ近い国石寺へぞ帰り行ゆ。笠判の云
度。客星ゆ依て疾伝丟の命刎と知。且武田氏の城元
ゆ。ゆ返し。我ゆ客ゆと接ゆて。甲伝
と辞ゆ者ゆ。後年ゆ合て。生人ゆ。

云へられと。人皆感合りけるとや

仏像事

判兵庫ゆ客星の勅文ゆ。伝丟芽陶と而みゆ。
絶て勝の者ゆ命。絶ゆ天余の続と絶ゆ。弘清と
名誉の仏匠と呂ゆ。見ゆ財面みゆ。本像と仏
らせ。ゆ自。彼後ゆ射ひ。彩と刎せ。もて。本像と
思し。我姿ゆ返ゆ返ゆ仏。せられ本像
ゆ越し。髪の毛と焼て。黒く著色せられば。完丟
容貌無。不動明ゆ仏。ゆ伝丟と
呂て。手姿ゆ本像と什麿と同せ。ゆ
実ゆ同ゆ一体と云へ。ゆて若ゆ法幹の後ゆ。不動の号ゆ

世も遠ざかれと云栄と拵て云れば。伝云ず〻呂れく
今日本より武こうと奮。雷名を惠うせ。ゐと得い猪俣多
と申共。少条。上杉。小長。そ外海道一の名将。は四人より猪
たるに。弁。廻り伝云。は人〻と敵よりかけて。居城をく乱入し
武い城下と焼払。又い今邑と押領し。又い幕下より屬衆あ
るど。心の伝より武威と振どる。伝云ず拵城より敵い未敵より
捕まてるるのく一ゑも敵より押付とえせるることたう。ゆゑ
ひるる故うもせよ。甲只の内人乱入せんりの。日本ふ於い
みべうも見ん。廻り伝。廻より振。予死ふうと安べ。四方の敵共安
堵而競ひ悦で。遂うえいるより推へられこと年来勇と
思ひたる伝云ず像也こと。ゑ見と切殺し。首と取さん

こと必定なれば。は木像の不動明王より剣と幾こと幸うれ別亜
より実の不動明王の像と成ぬるべ。いるる寄鑑ふう拵
踊うえいるべうべと有て。後より出炎と負出ゆ左より縛索
右より利剣と特せ。憤怒結跏。出の不動こそ成る。実より
伝云明京の如より。逝去の後。天正十年より至て。数勢囲
中より乱入ゆ。焚剃と焼立ふる時ふも。本尊の釈迦の
像と無より元のけて。火炎と免ふるりと。武田不動
と号て。今祭存。名ずの左と出ることゆ。伝云像
成就ふるうべうべ。伝云悦共有て後。光左土座平と良と名
是。伝の一字と給り。土座右衛門尉伝近と改さ也。去る之
場合戦より手死ふる成利式部伝ふるず同仏。百二十幾の

中七十騎と。後兄先方の勇卒三十騎。敵合百騎の士卒と
戰ひられ。手上信長の陣勢の勇士七人とれ彼を作
身を。見うして市先とを動ける。抑此度の射信近い武田
の中先。今丸筑前守虎義が協るのを。信玄寵光の小性也
乃ち。初若より忠克の志深く。又兵法に達し。先年川
中島烈戰の時も。彩骨と奮戰。小越の猛士。荒川伊豆が
切の時。兄と遊て。遂に荒川を討れ。信玄が危急を救ひ
う。手度如くの按戰なり。敵方の宝功と顯る。乃ち士大
将に命ぜられる。又上兄峯の城主。小幡尾張守信定と。徳
川に改。今川の長臣朝倉兵庫助と。後河守に命ぜられ
後兄先方の。忠克清と。土屋彼前と改名せらせ

右房つ射信近ぶ者。熱光十人なりと。彼前の書るを
作者なり。

韮山合戰之事

彼兄は。少年左系左之丞氏安文る。つもも。後兄とれ
あらんと。宝疫軍高を仏と長あり。牧と家縁信を彼て
再度強と。後房は推者んとの軍莊頗也。甲兄の
閑者なり。信玄兄と。氏安文る。いふあ。後河
は。一城うれんと及ぶ。氏安文る。氏は選任せ
彼も。敵源を。氏は選任せ。名而上るのを
の知恵。今あれ氏は子と彼まべ。此方ろ兄五乃さ。
情弱者は人出と指せ。天下平均の協るれば。皆は熟后事也

先氏妻こゝを法の一戦と俗とゞ「と有て。けれ打上旬寺方二
千餘人を従。富士の大宮まで打て出。まろう小條が領分
伊豆の韮山へ推出して。先ゝの術率と有。手近の与を
と芥田敬次郎。特く狼藉をぞせこゝまろる。さい氏改暴
ゝ原沢の城を攻伐で。田畑を毛薙しに引ぬ。千遠報也
と出ゝ。富下韮山の城を。笠原新出る守。芳賀術斎も
加勢として入味方ろう久ぶ。武田勢の狼藉をとるよう。笠原
能出る一千餘騎にて出。後をたゝく敵らんとする。伝云
屹とゝて。山縣昌景云ふ昌景。笠原ぶ物ゝ敵追り来
るゞ。疾向ちるゞ。崩るべきぞと有ければ。山縣畏て馳向ひ。世花
撃伐ぶ。一まの退兵五百餘騎。ぞの暮ふ菟入。甲北東敬。即

ゝの住人。辻堂の随一。辻孫云清耐盛昌一家殺とられ。ゝ
完竟の敬を実伐者と云ば。和田あゝ二家殺と入。長坂宮内
左衛門。河手文左衛門。殺下の云る名れ。山縣昌景敬ゝ足と云る間
させそと。采縣と手ぶり。く雪をぞ下幼とるせば。廣俗々
左衛門。曲閑左衛門。栗石源右門。我先ゝと殺を会て。突
立れば。笠原能出る一戦ゝ打崩され。立足もなく敗走して
城中にてぞ引ぬる。伝云宮侵とん。逃て返ゝ入れと制
せゝ立ければ。山縣昌景頃諸。虫ゝ勢を引揚る。將付
の戦ゝ山縣ゝ打ゝ頸。四百三十餘級也ぞ。ぞえろう。伝
云悦ゝ。ゝ功と賞せらゝて。狩宿改西如ゝ小條氏
改四万の大軍と。殺ゝ入ゝて。山中まで推出。戦兵己

三郎左衛門尉と云ふ。麾下の侍を頻りに召れば。伝吉兵衛尉
居る所の。さくば地向て。一戦に成と擬ふ。
山孫二郎兵衛尉。並山の城を押させて。敵軍陣伍を
連ね。敷島の三郎左衛門尉と向へれる。軍列厳密にして。
敵の寄せ。南の方へ。さくば地こゝに
遮んとの呂ひ。又敵の軍の恥を雪んとの呂ひ。益系
能中を道兵を率て城門を塞ぎ。
出る猛勢。烈火のごとく。
冒系兵を率て。先の敵軍中を撃ぶ。
敵の拳動れ。去来退の
退の退の戦。陽れ山孫冒系も。清卒を励し自大太力

と振て。而敵を撃て。屠る。猛威奮雷。向よ来る。加之
旗下の列兵。鋒を揃て。戦ふ。さくの城兵。是を益乱。
際を退き。高下武田方。辻孫三郎盛昌。列敵を押
伏。首撥切て。立上る。
征矢の尾末。辻孫三郎の
斗り。
て。辻孫三郎。
山孫。
向眼。
とする。呂系中。
べの。
斬
討
討

を俸せて引退い軍法は常り。共迫は仙合ぶ。之は
若敵いと。於ゆらぶて叱られば。孫元陽盛昌は
和入。見い最の法一云ふと。拵る首を磯とめげ拵て
矢を引抜。砂を紙で疵ひ人塗身。而も高ば敵中は
切て入。縦横亜衛は働れば。味兵逐は切崩され。城を
出て敵走とると。弱る敵分入はせよやとて。砂煙を巻く
追詰る。南下みく城中より。玄方賞伯著当一千騎の
荒まを以押めと。分命と猜まば防戦へ。山孫昌永
見とりて。采隙とひと人。源入とあべくはと。須臾は軍勢
と引揚んと欲と。城兵一同は突出れば。敵を
うの山孫も。引俣んでどうえうけ。河は甲兵勢のあり

ようと。向き孫の四は。墓とん船といふ文字をかる拵ゆて
川京村伝云所と名乗。孫引拵て五人合せ。迫慕ふ敵を
蹴ゑ突崩し。既に六交迫を迫て。ぶと碎て突ちるるハ
天晴離倫の奉動と。敵も味方も感る。山川京村ば働は
まんく。敵も受尚るて陣中へ引五人るの息を休兵て。再出
べく敵も五ろれば。甲軍俵ること打ろる。其後山孫も勢
とまどめ。三俵とはてで推引る。昌京伝云ふ謂て。今日川京
村ば働と云はんくうれば。伝云感悦有て。軍は最ハ功隊れ
は五とは大。川京村ば働。六交は五て勇戦ろるる。例は紀
勲ろう。賞功不論国と有て。手疾川京村へ盃をりされ。今の勇士
分の刀と賜う。手外武功の勇士共へも。伝云ぶ

380

碁石金と三家完璧で下されぐべ。彼人是と義ぶるも、社会の
手段。感状を授くまて。川原村うぞ授られ申る

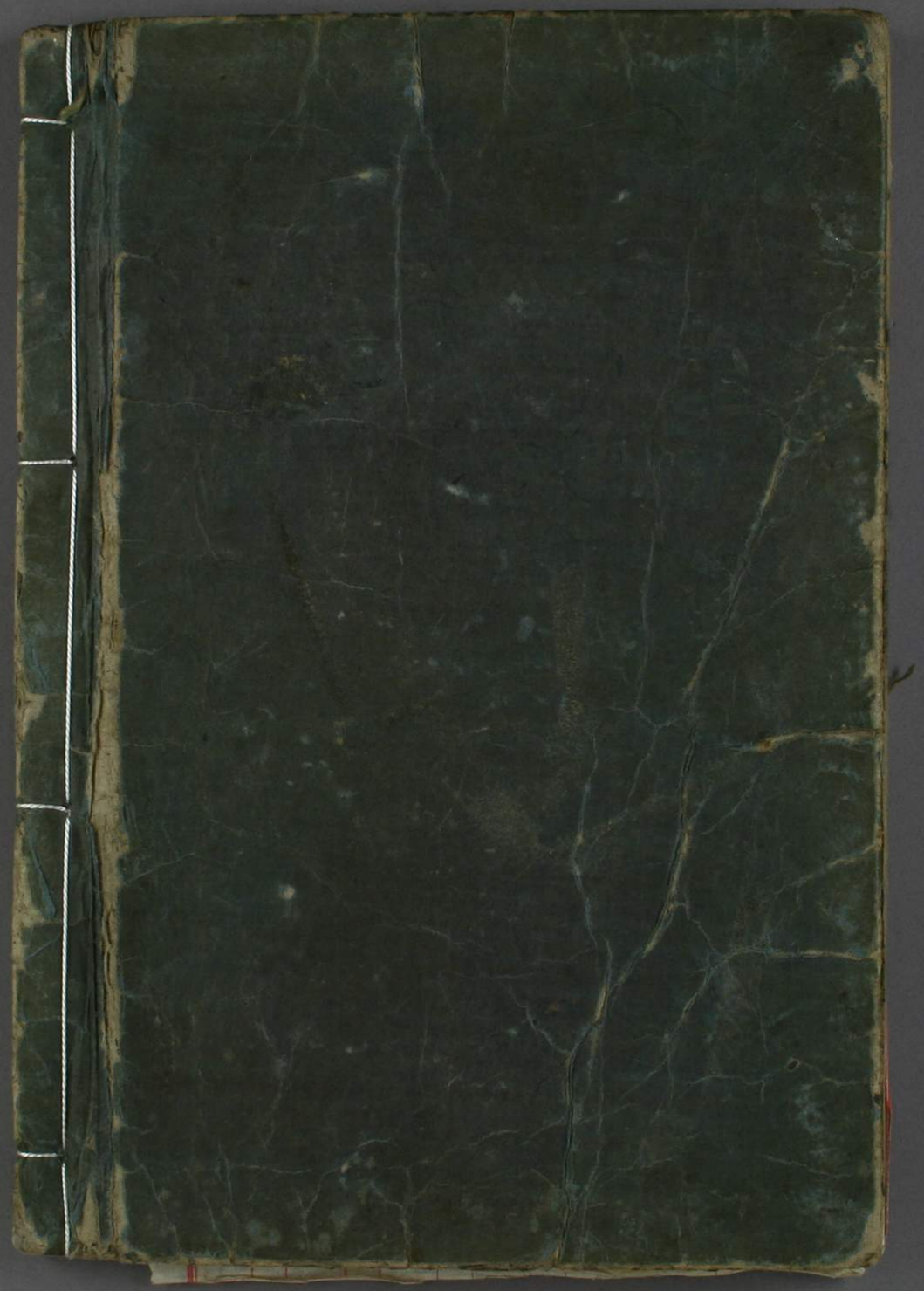
武田信玄大外候こ事

扨も武田大膳亮信玄。蓮山を出立。高坂弾正小山
田左衛尉信義と先陣こて。三隊に推出さる南下小條氏
攻ハ。箱根の山中に出られしが。信玄の旗のまとりんより。諸勢
と一まとりて。山中を推下して。三隊の小三十騎ばかりと云て
無勢四万六千騎ばかりなり。備を五十六隊に組まれぐ。敵
手の強弱山嵐に飛揚し。甲冑秋陽に耀き威凛こたること
雷霆の揮ぐ如し。是上杉に合せまて。氏政と堅固に構
て。信玄と対陣の中に。孫信玄息に越後と出く。武田方の後に

迫り。北越の支軍。未後に強て。一挙に信玄と対れんとの計
略とぞ云ふ。紀中。松田尾張守の道。老練の勇士なれば。味方
大軍左。敵より侮ぜ又強くんぐる。名ある者。外候ふ出べき
に必定なれば。ふ云に起て。先是と対れべしこて。そ乃筋
と考。紅紫ふ元社の義に。究竟の兵士を埋伏せさせて
ぞ待居る。又武田方に於ハ。信玄諸隊ばを呂れて。小
条勢。四万に作る大軍と云ふ。今味方一万騎ばかり向ふこと
頗る切なれば。兵法に。敵勢多る間へ。味方後と比の為
候ぐん報と呂べ。予自是と動べしこて。初る場に陣を張
内後修理亮昌幸。弟隼人佐昌勝。小山田左衛尉信定。信
源左衛門尉信綱。小山田左衛尉信茂。其外是に次ぐ左衛

土屋伐茶仍下。練輝の雪士後より百騎ばかり引退と雖ども
將武田晴信伝入道伝雲。大外候とて出る。雪
くも。亦充入かゝりける

20

[illegible]仍下。二陣の戦場より而。氏安逝去。[illegible]
伝雲謙信亦逝去。[illegible]
止まて章と統る。[illegible]甲斐及小越の將士
武畧雪戦の勲功。悉後編六巻に盡て次全
部[illegible]。拝紀已成。冥[illegible]方の通[illegible]と[illegible]

繪本烈戦功記後編巻之六畢